

第17回 ダイワハウスコンペティション 作品募集

暮らしの中で、今まで当たり前に使えていた電気がなくなるとどのような楽しい家ができるか。これが今回のテーマです。

現代の家には、あらゆるところに電気が必要です。テレビや冷蔵庫、エアコンや電灯、コンピュータやスマートフォン、それらすべて電気を必要とし、それに頼って暮らしを成り立たせ、家のかたちも決まっているといえます。効率が追求され、情報が溢れることが日常となると、その当たり前から戻れず、五感でものを理解することを忘れ、人間の可能性や自由を失って

ることに気がつかずにいるといえるかもしれません。では、その当たり前に使えた電気を使わない家を考えたら、どのような豊かさが手に入るでしょうか。昼から夜、そして朝を迎える時間の流れに敏感になり、季節や温度の変化とどのように向き合って生きていくかを考えることになったり、家の中では情報から遮断されることで、家族との距離や家の外の他者との関わりが変化するかもしれません。そして電気を使わないことを追求していくと、電気というエネルギーそのものの価値や、それがどこからきて、この先どうなるかという

ことを考えることになるでしょう。電気がなかった原始的な時代の家に戻るのではありません。不便だから辛いのではなく、ないからこそ得られる喜びをかたちにして、それがこの先の希望になるような提案を求めます。

敷地は架空でもリアルでも自由です。戸建て1棟や、戸建ての集合、併用住宅、リノベーションなど、形式やプログラムは問いませんが、ひとつの家として必要な空間を提案してください。人間の想像力で自由を考えていくきっかけになるような家を考えてください。

電気を使わない家

テーマ

- 【審査委員】
 審査委員長
青木 淳 建築家 AS 東京藝術大学教授
 審査委員
堀部 安嗣 建築家 堀部安嗣建築設計事務所 京都芸術大学大学院教授
平田 晃久 建築家 平田晃久建築設計事務所 京都大学教授
小堀 哲夫 建築家 小堀哲夫建築設計事務所 法政大学教授
八田 哲男 大和ハウス工業 執行役員

- 【賞金】
 最優秀賞(1点) 200万円 および記念品
 優秀賞(2点) 各30万円 および記念品
 入選(4点) 各10万円 および記念品
 (以上、1次審査通過7作品)
 大和ハウス工業賞(1点) 30万円 および記念品
 佳作(10点) 各5万円
 総額380万円 ※すべて税込み

※大和ハウス工業賞は1次審査通過7作品の中から、公開2次審査のプレゼンテーションと質疑応答を通して、審査委員とは独立した形で大和ハウス工業が1作品選出する賞。最優秀賞、優秀賞、入選の中から選ばれるので、たとえば、最優秀賞がさらに大和ハウス工業賞に選ばれた場合、230万円の賞金が授与されます。
 ※2次審査のプレゼンテーション内容によっては、審査委員の判断で上記賞金金額の配分を変える場合があります。

登録・作品提出締切

2022年9月29日(木) 消印有効

大和ハウス工業株式会社
 本社 大阪市北区梅田3丁目3番5号 〒530-8241
 東京本社 東京都千代田区飯田橋3丁目13番1号 〒102-8112
www.daiwahouse.com

コンペについてのお問い合わせ
<https://www.daiwahouse.co.jp/compe/>
 主催：大和ハウス工業株式会社
 後援：株式会社新建築社



「電気を使わない家」を考える



座談会風景。左から、八田氏、小堀氏、堀部氏、青木氏、平田氏。新型コロナウイルス感染症予防対策を講じたうえで実施し、撮影時のみマスク・パーテーションを外した。

当たり前を問い直す

八田 今回で、ダイワハウスコンペティションは第17回を迎えます。本コンペは、建築の仕事を目指す方にとって非常に有効なトレーニングの場であると同時に、夢をもって建築を語る機会でありたいと考えています。前回に引き続き内容を深めていきたいと思います。よろしく願いいたします。

司会 前回の「触れて触られる家」はコロナ禍が暮らしや家をどう変えたのか、という発想から生まれたテーマでした。今も変化を続ける現在の社会と暮らしの中で、応募者にどのようなことを考えてもらいたいでしょうか。

平田 最近は家具や人のふるまいの描き込みを、高い解像度で設計する学生が増えていて感心させられます。ただ、その先に一体何を見据えているのか分からないという印象を受けることも割とある。建築は、身体的な欲望を満たすためだけでなく、快適さを生むためだけのものでもないわけですね。具体的に設計したものの先に何を見通すかが大事だと思うんです。

小堀 平田さんに共感する一方で、ウクライナで起こっている状況を見て、未来は予測できないものだと痛感しています。現代でこんなことが起こるとは想像もしていなかったし、自分も偏った情報にまみれているのではないかと、と疑わざるを得なくなりました。未来や他者をどう想像するか、自他の溶け合う領域は存在するのか、ということが今問われている気がしていて、応募者にはそういう感覚をもって設計に望んでほしいです。

堀部 これまで当たり前だったことが当たり前ではなくなる時代に突入していますよね。随分前に、水中カメラマンの中村征夫さんがインタビューで、「世界でいちばん美しい海は東京湾だ」と答えていました。東京湾の魚は海中に沈むタイヤなどを棲家にしていて、足りないものをその場にある資源で補いながら生きている。その姿はたくましく美しいという話です。これからは物資も少なくなるし、もしかしたら建築をつくれな時代になるかもしれない。その時、われわれ人間も先人たちが残したものを、それが正の遺産であれ負の遺産であれ、あり合わせて利用するようなたくましさが必要になってくると思います。応募者には、私たちの世代には発想できない独自の「当

座談会参加者

青木 淳 (建築家 AS 東京藝術大学教授)

堀部安嗣 (建築家 堀部安嗣建築設計事務所 京都芸術大学大学院教授)

平田晃久 (建築家 平田晃久建築設計事務所 京都大学教授)

小堀哲夫 (建築家 小堀哲夫建築設計事務所 法政大学教授)

八田哲男 (大和ハウス工業 執行役員)

たり前」に向かい合って建築的な表現で見せてもらいたいです。

八田 住宅においても、昔は新しいもののみを求めてすぐ建て替えるという状況でしたが、今は逆に長寿命化へ向けたさまざまな取り組みが広がっています。これからは、単にサステナブルであるだけでなく、自分達の周りにある資源を読み解き、自らの望む環境に適応させることが重要になるでしょう。

青木 今、世の中は正しいことしかしてはいけないという風潮が蔓延し、自己規制でがんじがらめになっています。「自由に設計して」という課題を学生に出しても、ありきたりな部屋を設計してしまう。自分が生まれ育ってきた環境がよくて、それ以上のものが必要だと思えないそうです。でも、果たして本当にそうだろうか。一度その先入観を捨てて、自らの暮らしを問い直してほしいと思います。堀部さんがおっしゃるように、すでにあるものをもう一度見直し、再構成して新しい住み方を想像してほしいです。

何も無いことを肯定し、造形と向き合う

堀部 これからは物質的、造形的な魅力よりも、本来の土地や暮らしの魅力、それらの関係性を構築することに建築の考えがシフトしていくと思います。とはいえ、造形力を否定しては建築は評価できない。美しいものをつくりたいけれど、物質的な造形に意義を見出せない、と悩んでいる方も多いと思います。前回の最優秀案は、彼らの頭の中にある、物質を超えた世界への希求が表現されていましたが、造形することを避けているようにも感じました。ものに溢れ、物価が上がり、新築が現実的ではなくなっている社会の情勢を目の当たりにし、造形は必要なかというジレンマに陥っているのではないかと危惧しています。

八田 人間は創造的に造形することができる唯一の生物ではないでしょうか。だから、造形することを否定するべきではありません。

青木 建築をつくる時、アイコン的な役割を求められることは少なくあり

ません。ですが、私は建築がそうでないものであってほしいのです。むしろ、建築を消してみたいとも考えます。そう考えながらも、ものとしてある建築とは何か、ということをお考するのが、私にとっての建築です。存在しているけど、目には見えないものを見えるようにつくるというのはテーマのひとつになり得ないでしょうか。

平田 ものとしてではない建築のあり方を、存在感が少ない、というように、結局ものの次で解釈して生まれる空間は、人を自由にはしません。そうでない解釈をしてもらわないといけませんね。

堀部 古今東西の集落を見ると、それぞれの家が特に大きな特徴をもっていないと感じます。もっとも強調されて見えるものは、井戸や庭の木など、建築の周辺要素です。建築が物質的な主役になっていないということです。ですが近年、われわれ建築家はひとつひとつの家に物質的な役割と力強さを強引に含ませてしまったのではないかと思います。それよりも、見えないものを見えるようにするよう、建築の周囲に力点を置くような仕掛けを点在させる方が健全な気がします。



青木 庭の井戸や木も、ひと括りにして家と呼べるのではないかと思います。自分の領域として占めている場所全体を家ととらえるということです。**平田** 家をつくる材料は、ものだけではありません。そのものには人間が投影した思い、記憶という見えないものも含まれています。たとえば、たらこスパゲッティを食べる時、舌で感じる味とは別に、脳内でたらこスパゲッティの名前が溶け合い、その意味も含めて味を認識しています。ものと見えないものの組合せが全体となった時、何になるのかが重要です。

小堀 われわれの都市にはいろいろなものがあり、非常に豊かですが、果たしてそこに本当の自分の居場所はあるのだろうかと考えることがあります。物質的な豊かさとは反対に、何も無いということに価値を見出していく家という方向性がよいのではないのでしょうか。

堀部 もので溢れるこの時代に、何かと何かの組合せでこんなものができる、というように、賄い料理的に造形を考えることはできると思います。思えば、何も無いところから象徴的な造形を生み出すことは非常に少ない。表メニューで一生懸命おいしいものをつくらうとするよりも、かえって賄いの方がおいしいみたいなこともあります。その可能性を探ってみたいです。

「キャスト・アウェイ」(ロバート・ゼメキス監督、2000年)という、無人島でのサバイバルを描いた映画があります。島に飛行機が墜落した後、主人公は一見何も役に立たないと思われるものをうまく利用して生き延びるのです。たとえばアイススケートの靴が流れ着いてきたらそれを包丁にしたり、ドレスの一部を使って魚を捕らえる網にしたり、バレーボールを神様として崇めたり。生活に必要なものがなければ、そこにあるものをうまく利用し、物質

が物質を超えて精神的な存在になりさえもする。建築も、そういったことをこれから考えなければなりません。だから、造形や物質を否定するのではなく、物質がないということを肯定するという考え方もあると思います。



平田 東京に住んでいるカラスは、東京の街並みを山だと認識しているそうです。自然の中では上から攻撃されないように木の股に巣をつくるのと同じ原理で、電柱の変圧器の下に巣をつくっています。動物は自然も人工物も区別なく認識している一方で、人間だけがそれを分けて考えている。僕はもう一度、その区別を取り払って建築をつくったらどうなるのかを考えてきました。しかし、たとえば、先ほどの東京湾の魚がタイヤを棲家としてつくり変える、ということ人間も参照しようというのは、人間がつくり出したものに対してロマンチズムを抱きすぎているような気がします。人新世といわれる今の時代においてはもう少し掘り下げていかないと、少し気楽な感じになってしまうかもしれませんね。

堀部 たとえば、そこにエネルギー的な観点が加わると現実的な問題に引き寄せられますよね。タイヤのような廃棄物と自然エネルギーを繋げて考えるとか。捨てられたタイヤを住まいにすることで環境負荷が減る、というように今日的な自然環境問題とうまく結びつけられれば説得力があります。

電気を使わない家

青木 ものが無いということに向き合うために、いくつかの決められた物質だけを使って家をつくってください、とするのはどうでしょう。テーマではなく、条件を設定するという方向性です。

堀部 今ある冷蔵庫の中身でおいしいものをつくる、ということですね。逆に、使えない物質を決めるという条件もあると思います。今まで当たり前に使えたものがなくなる方がむしろ、人それぞれ多様な考えをもつのではないのでしょうか。

平田 テーマがあまりにも大きくて抽象的だと、サブテーマをつくるコンセプト力を競うようになってしまうので、具体的な限定を設けた方が、つくっているものと自身の考えを往復させる案が出てきて、建築自体の面白さが生まれると思います。

堀部 最近の若い人は、ものの特性やポテンシャルを知らないなと思います。ものに限定を設けることで、そもそもそれはどう生成されるのか、だ



れがつくっていてどこからくるのかなど、ものへの見方が深まるのではないかと期待もあります。ものに徹底的に縛られてみてほしいですね。

八田 たとえば今は合板が入手しづらいですが、合板がないと設計が難しいということ、学生は感じられるでしょうか。私たち実務家は合板のありがたみを知っていますが、彼らはそれを知っているでしょうか。

青木 知らないでしょうね。身近なところで、電気がない、というのはいかがでしょうか。

小堀 電気がないということは、冷蔵庫やエアコンなど、現代の生活必需品がほとんど使えなくなる。現代の家がどう変化すると電気が不要な生活が成立するのか、気になります。

八田 今の社会は電気によって発展し続けてきました。快適な空間を生み出すために人間が求め続けてきたものを放棄するという考えはあり得るのでしょうか。

平田 完全に放棄すべきだというのは、思考実験として、それが無いとしたら何が可能になるかをコンペで問うことには意味があると思います。これまでの暮らしを変えないと人類がうまく生きていけないという段階になっていて、もしかしたら未来の人間は日常的に昆虫を食べているかもしれない。私は食べたくないですが、それは今の私たちの感覚にすぎません。これまでとは違う生き方を想像しなければいけない今、無理やりでも電気がないと仮定した時に何ができるかを考えれば、新しい建築のあり方に近付けるかもしれないという希望を感じます。堀部さんのおっしゃる賄い料理的な、あり合わせでもものをつくる考え方はこういう状況の中でこそ発揮されてくる気がします。

堀部 施工においても電気を使えないのでしょうか。

青木 現代で建築をつくるほとんどの素材に電気は使いますから、生活の中では電気を使えない、くらいに限定しないと設定として難しそうです。暮らしの中で「電気を使わない家」ですかね。電気以外は現代のものを何でも使えるとすると、いろいろなことが考えられそうです。そして、それは電気のなかった時代の原始的な生活に戻ってしまうのではないはずですが。

堀部 自分の家では電気を使えないけど、冷蔵庫はコンビニで代用したり、仕事は図書館のネット環境を頼ったりと、それこそあり合わせな暮らしの提案は考えられますね。周囲の施設を自分の暮らしの中の領域ととらえれば、昔の電気がない生活に戻るのとは違う提案が生まれそうです。

八田 私はキャンプによく行くのですが、そこに何を求めているかという、もので満たされた都会の豊かさからの解放です。ものが無いからこそ、不自由の中に豊かさを感じられるのです。これだけ豊かに満たされた環境の中で、自分の家くらいはそうでなくても問題ない、という説得力のある表現ができれば面白いですね。

平田 深掘りしてエネルギー問題などに引きつけすぎると、住宅での電



力消費量よりも工業製品を生産するのに使う電力消費量の方が大きいから、そこをなくしたところで根本的に解決しない、という数字上の話に収束してしまいます。課題としては、あくまでも仮定の未来を想像した時に生まれてくるものを問うことに意味がある、という方向にしたいですね。

司会 それでは、第17回ダイワハウスコンペティションのテーマは「電気を使わない家」にしたいと思います。

応募者に期待すること

小堀 電気という当たり前の存在がなくなった時、人間の感覚や建築のあり方がどう拡張していくかを提示してもらえることを楽しみにしています。このテーマにはエネルギー問題や環境問題など大きな背景がありますが、でもやはり自分ごととして考えてほしいです。現代に生きる自分のリアルな感覚に寄り添い、深く考えてみてください。

平田 僕は今、激動の時代に生きています。しかし、今までの当たり前前に引っ張られて、なかなか生き方を変えるのは難しい。そこで、電気がないという思考実験的な条件に向き合い、想像力を働かせることが、これまでの当たり前から解放され、本当の意味で自由になれるきっかけになるのではないのでしょうか。私たちが生きる現代も、数百年前の人にとっては、想像し得なかったものだと思います。想像もつかないような暮らしを提案してほしいです。

堀部 このテーマは、今こそ深く考えるべきものだと思います。電気がなくなった現代の暮らしは、単に昔の生活に戻るということではありません。それは、今までの当たり前の時間の流れ方を、どうすれば変えることができるのかを考えることだと思います。

八田 人間はこれまで電気を使って住みやすい空間をつくり上げていくことに尽力してきましたが、それがなくなるといって悲観的になるのではなく、そこに向かってどう挑戦していくのか、どう先に進むのか、ということを示してほしいです。

青木 電気がなくなると、時間の流れも時間に対する感覚も変わるでしょう。そうした変化を敏感に感じることで人間の可能性が拡張するようなことが起こっても楽しいだろうと想像します。夏は冷房がないと暑いかもしれませんが、でも、どうすればその状況が楽しくなるかを考えてほしい。電気がないことによって、家族の団欒が増えることもあるかもしれません。不便だから辛いというのではなく、電気がないからこそその楽しさを生み出す提案に期待しています。



(2022年4月15日大和ハウス工業東京本社にて。文責：本誌編集部)